

第二編 歴史的背景

第一章 原始

第一節 先土器時代

一 先土器文化

時代の背景

先土器時代は縄文時代に先立ち、今から一万年前に約二〇〇万年も続いたといわれる時代である。

この時代は今日よりかなり寒く、寒冷な気候と温暖な気候が交互にあったとされ、寒冷期には氷河や氷床が低地にも進出していた。気温も現在より年平均で七度も低く、この地方に例を取ると、長野県の高冷地の気温に等しかった。しかも人類はまだ土器を知らず、石器を道具としていた時代で、この石器を使用して狩猟・採集の生活を送っていたため、旧石器時代とも呼んでいる。

植物は、日本の中央部を境にして東北地帯は落葉広葉樹林、南西地帯は照葉樹林が繁茂している。しかしこの当時は、南から落葉広葉樹林・亜寒帯針葉樹林・ツンドラ地帯となっていた。一方動物は、ゾウなどの大型獣、シカなどの中型獣、ウサギなどの小型獣が住み、特に大型動物群としては、ナウマンゾウ・ヤギユウ・オオツノジカ・ヘラジカなどが住んでいた。これらは北方より渡来した動物群と、中国・朝鮮半島より渡来した動物群の二つに区分されている。

一方人類についていえば、世界最古の人類はアフリカで誕生したといわれ、今から二〇〇万〜三〇〇万年前のことで、その後、猿人・原人・旧人・新人・現生人と進化の過程をたどった。これらはアフリカから、ヨーロッパ・アジアと移動し、アジアでは北京原人・ジャワ原人となるが、今から五〇万年も前のことである。実に進化の過程は一五〇万年の歳月を要して、世界各地に居住地を求めて移動したのであった。

日本での最古の人類は、全国各地の遺跡からみて、旧人と新人の間にあるとされているが、およそ三万年前の先土器時代人である。しかし今後の発掘によつては、旧人以前の原人が最古と証明される可能性は、十分に考えられることである。

先土器文化は、ナイフ形石器文化・槍先形石器文化・細石刃文化の三つに分類され、文化も前記の順に推移している。その経過には約二万年の期間があつて、継続年代の最も長いのは、ナイフ形石器の時代であり、一般的には三万〜一・五万年前といわれている。これらは刃器文化↓尖頭器文化↓細石器文化↓有舌尖頭器文化にも区分されていて、その終末期には、大型の尖頭器や一部分の磨製石斧も出現するようになる。一方では有舌尖頭器文化の時代には土器文化が導入されて、縄文文化の母胎を形成していくのである。

流域の遺跡

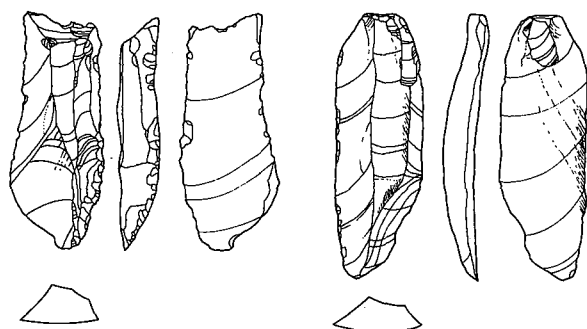
飛騨川流域付近の代表的な遺跡としては、美濃加茂市・可児市・八百津町があげられる。それらの遺跡の多くは、市井の人々の発見によるものであり、それが端緒となって戦後は数多くの発掘調査が行われてきた。

北野遺跡 美濃加茂市市橋から富加町滝田にわたる広い範囲の遺跡である。ナイフ形石器や細石刃類が数多く出土していて、周辺は県下最大の遺跡といえる地域である。

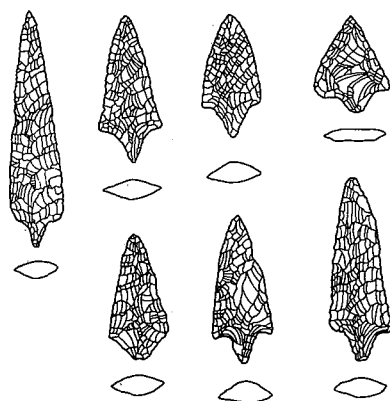
川合遺跡 可児市土田地内にあつて、木曾川と可児川が合流する一帯で、かなり広い地域である。先史遺跡の立地にふさわしい地形をなしていて、有舌尖頭器・部分磨製石器などが発見されている。

越水遺跡 八百津町久田見地内の通称久田見高原にあつて、ナイフ形石器・有舌尖頭器など数多くの遺物が発見されている。周辺の状態がよく県内でも有数の遺跡である。

そのほかには、下呂町乗政遺跡があり、野尻・宮地などとともに、ナイフ形石器・尖頭器が発見されている。小坂町南垣内・萩原町高城山・金山町渡・白川町切井・小丸山の各遺跡からは、先土器時代と思われる尖頭器などが発見されている。



県内出土石刃状剥片（岐阜県史）



県内出土有舌尖頭器（岐阜県史）

川辺町では、本格的な調査が行われていないので、先土器時代の遺物は発見されていない。しかし周辺市町村の遺物から考えて、この時代既に川辺町でも人間が住んでいたと推定される。その可能地域としては、上川辺地内と比久見地内があげられる。

二 先土器時代の生活

日常生活

一般に先史時代あるいは無土器時代といわれているのは、今から一万年以上も前のことである。

“御岳山”は既に休火山となり、気候も寒冷の氷河時代から温暖期に入りつつあった時代であった。

この当時の人々はまだ文字を持たず、土器を作ることも知らず、専ら狩猟と木の実や果実を採って生活を営むという貧弱な採集生活の日々であった。必要な道具類は木と石で作ったが、石を磨いて形を整える技術はまだ体得していなかった。複数あるいは小集団で日当りのよい場所を求めて、木の枝と葉で組んだ仮の住まいを建てながら、獲物を追って移動する。

当時の気候は寒暖の差が激しく、夜になればかなり冷えこんだが、彼らは裸のまま、たまに毛皮をまとうことがあっても、普通はたき火をして暖をとっていた。最もたき火は危険な動物を近付けない役目も果たしてくれた。一家族あたり四〜五人で構成された家屋は、数棟が共同体となって、すべて集団体制での生活であったが、これは獲物を容易に捕えるための古代人の知恵でもあった。

この当時の家屋は地面に穴を掘ることはなく、支柱も細くその上に木の枝や葉・草を掛けた簡単なものであった。

そして炉が作られていたことであろう。火は生活に欠かせないもので、食物の調理に暖房用に、あるいは照明にも利用された。この炉を中心に一家の団らんがはかられたことと思われるが、炉は石で囲ったもので、この時代はまだ屋外に設置されていたといわれている。

住居には調理用具、それに道具を作るための石が配列されており、敷地内には三軒から五軒位の複数生活が営まれていた。そして住居間には適当な間隔があつて、共同の作業場も設けられていたと考えられる。したがって一集団としては十数人の生活の場が想定され、他集団とのバランスも取られていたことであろう。

狩猟・採集生活が中心であり、食物が欠乏すれば住居の移動が考えられる。しかし先土器時代人は、動物の移動や植物の実りの時期に応じて、集落を構える場所を考慮したのである。比較的長い期間を一定の場所に定住し、あるいは季節によって周期的に移動したことも考えられる。いずれにしても季節的な要因と環境がその背景にあったのである。

食糧

重要な食糧として狩猟獣があるが、当時はナウマンゾウ・オオツノジカ・ヤギユウなどの大型獣がその多くを占めていた。これらは食肉のほか皮は衣服となり、骨は骨角器の材料となつて、生活に欠かせない存在であつた。しかし先土器時代も後期になると、前記の大型獣はやがて死に絶えて、シカ・イノシシなどの中型獣が狩猟の対象となつていった。一方、この時代の河川魚労については明らかでなく、一般的には縄文時代に入ってからとされている。

植物採集も重要な食糧資源の一つであつた。主なるものとしては、クルミ・クリ・トチノミ・ドングリなどの堅果類、ヤマイモ・ユリ・ワラビなどの根茎類、イチゴ・ヤマブドウ・ナシなど漿果類であつた。

動物の肉類はそのほとんどが焼いて食べたが、煮て食べることはなかった。先土器時代はまだ土器を持たなかったからである。炉を囲んで肉を焼く姿は一家団らんの表徴であった。

狩猟と採集、そこには男女の役割分担があった。男性は獲物を求めて終日山野を駆けめぐり、女性や子供は周辺の植物採集にたずさわったことであろう。そして調理や加工は、はじめに男性が解体し、女性がそれを調理・加工したのであった。一年を通じて自生する動植物に食糧を依存する関係から、そこには季節の変化に応じた食生活があったのである。

道具

狩猟具などの道具は数多く発見されているが、なにに使用されたかとなると不明なものが多い。柄に使われた木製部分が腐食しているからである。しかし石器となると狩猟用具として使用されたことは明らかであり、それらは槍先形石器・ナイフ形石器・細石刃などに区分される。

槍先形石器 先のとがった形に加工されたもので、長さは五〜一〇センチメートル位である。突き槍・投げ槍に用いられたが代表的な狩猟具である。

ナイフ形石器 木を切る場合に使用されたもので、五〜一〇センチメートル位の先のとがった石器である。木や皮の加工のさいにも使われたと推定される。

細石刃 小型の細長い石器で、柄に取り付けて使われたと推定される。主に小型槍として作られたものであろう。そのほか錐の先のように細い刃のある錐形石器や、一部磨きのある磨製石斧がこの時代の主なる道具であった。

調理用具として代表的なものに敲石がある。平らな円形の石で、クルミなどの殻を割るさい用いられた。また皮や肉を切るために剥片はくへんと呼ばれる鋭利な石器も作られていたのであった。

第二節 縄文時代

一 縄文文化のおとずれ

縄文文化

縄文式土器の使用された時代を縄文時代と呼んでいるが、前六〇〇〇年ごろから前二〇〇〇年ごろまでの時代である。その文化は日本特有のもので、文化期を早期・前期・中期・後期・晩期に大別されているが、土器の表面が縄目模様であることからこの名がある。彼らがいつ、どこでこの土器を作ることを知ったのかは明らかでない。

土器製作の技術は当初は尖底土器で、食物などの採集用に使用され、その後煮沸用土器さらに貯蔵用土器に発達し、渦巻文・蛇体文を立体的に配した華麗な文様も付けられるようになった。尖底であるため熱効率がよく、煮炊き用に使われたが、生活上やがて平底土器へと変り、後期に入ると、用途に富んだ小形の土器も作られるようになっていった。

土器の作り方は粘土で形を作って陰干しをして、すり鉢状の穴に入れて高熱の灰に包んだまま、土器全体の温度を数百度に上げる。そして焼灰の冷却するのを待って取り出すと土器ができあがっている。縄文時代の後期に入ると、青味を帯びた光沢のある土器へと技術が進歩するが、燃料の外側を生木の葉でおおって、青い炎でむし焼きにする製法である。この方法がどこから伝来したのか不明であるが、種類も数量も大量化が可能となった。

この時代どのような人間が住んでいたのか、その一つにアイヌ原住民説がある。原住民はアイヌと考えられていたが、その後アイヌでもなく、今日の日本人の体質を持つ人間でもないと言われた。しかし縄文時代の人骨が数多く発見され、研究が続けられるにしたがい、この人骨が現代日本人のそれと同一であることが明らかになってきた。これにより従来の縄文土器をアイヌ土器とする説は消え、原日本人が既に土器や石器を作っていたことが定説となった。

流域の遺跡

早期には押型文土器が中部日本を中心に広く分布したが、この土器は山形文・楕円文・格子目文などの種類がある。そして文様もしだいに粗大化していくが、前期に入るにしたがい、集落の拡大とともに薄手の土器がすう勢を占めるようになった。流域付近の主なる遺跡としては、美濃加茂市狭間・則光、八百津町不老井、白川町中の森がある。

中期になると集落の定着化とともに、西日本・東日本の土器が広く分布し、多様な土器が各遺跡から発見されている。一方、石皿・石斧などの石器もかなり広い範囲に渡って広まっている。主なる遺跡としては、美濃加茂市神明・二ツ塚、八百津町南森・林、白川町中の森がある。

このうち美濃加茂市神明遺跡は、木曽川と飛騨川の合流地点にあつて、東西一〇キロメートル、南北五キロメートルの平坦な地形にある。河岸段丘上には縄文時代中期の遺物が特に多く、この付近で最も栄えた地域である。

後期・晩期に入ると東西文化がこの地方に複雑な影響をもたらし、地域の独自性は失われていくようになった。土器も無文土器あるいは条痕文のみの粗製土器が出現している。流域の主なる遺跡としては、美濃加茂市狭間・二ツ塚、八百津町立壁・小林・定屋敷、白川町中の森がある。

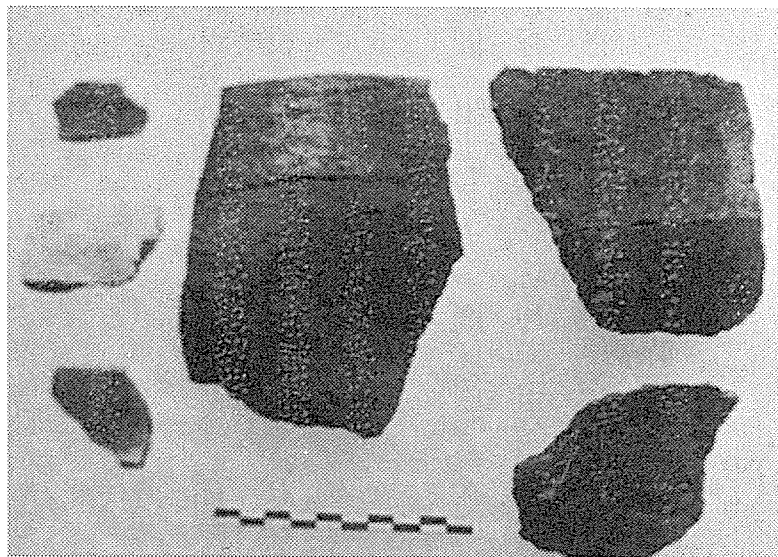
流域上流の代表的遺跡に下呂町峰一合遺跡がある。飛騨川左岸の湯ヶ峰山麓にあつて、縄文時代前期の土器・石器

など、出土品が多いことがこの遺跡の特色である。峰一合遺跡には竪穴式住居が復元されている。

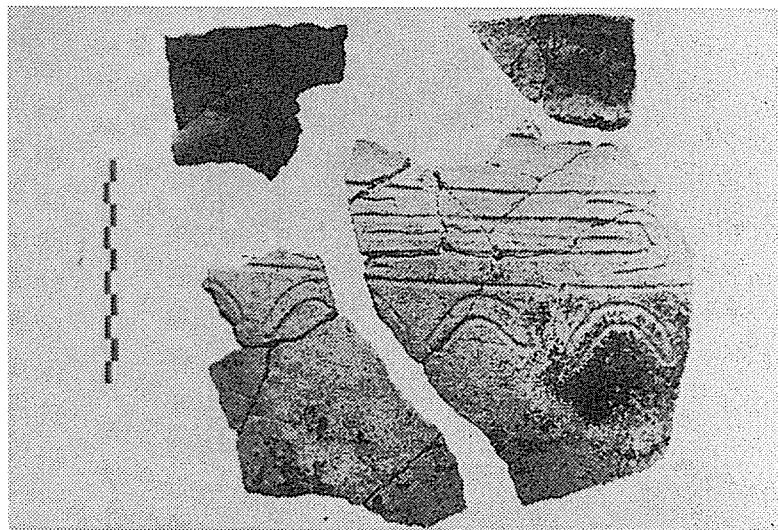
二 川辺町の遺跡

遺跡

川辺町内の各地の遺跡からは、数多くの遺物が出土しているが、本格的な発掘調査が行われたのは上川辺地区にある。昭和四四年（一九六九）四月に、南山大学によって調査が実施されている（後述）。そのほかには同五四年（一九七九）の土地改良事業によって、比久見・下吉田両地区から、縄文時代中期と推定される土器・石器が、断片的ながら出土している。この遺跡からは炉の跡も二箇所あったといわれていて、



濡枝遺跡出土品



濡枝遺跡出土品

発掘調査が行われれば、縄文時代前期の遺物が発見される可能性がある。

以下町内の遺跡地は次のようである。

能義遺跡 中川辺字能義

天龍工業川辺工場建設のさい広範囲から出土したもので、土器・石器は十分な調査も行われず埋戻しされた。当時の関係者からの話から推定すると、縄文式土器と磨製石斧が発掘されたが、散逸して所在不明である。この地域は縄文時代（後期）から、弥生時代にかけて人々が定着したと考えられるので、遺物もその時代と推定される。

濡枝遺跡 中川辺字濡枝

川辺中学校のプール建設のさい広範囲に出土したが、既に同じ敷地内にある中学校新設時にも、遺物が出土したものとされる。いずれも十分な調査が行われず埋戻しされている。当時の関係者からの話から、縄文式土器（中期）のほか、石斧などの石器が数多く発見された。その一部が中学校に保管されているとのこと、しかし特定できず、そのほかのものは散逸して所在不明である。この地域は、縄文時代（中期）から弥生時代にかけて人々が定着したところである。

御座野遺跡 上川辺字社宮地

揚水場などの土木工事のさい畑地から発見されたもので、相当広範囲な遺跡と推定される。しかし十分な調査は行われなかった。出土品の形状は関係者の話から、石斧・石錐・石棒・石刀・石庖丁など、そのほか多様な縄文式土器もあって多岐にわたっている。恐らく縄文時代（中期）から弥生時代にかけての、集落群の遺跡地と考えられるが、出土品は散逸して所在不明である。

松葉遺跡 上川辺字松葉

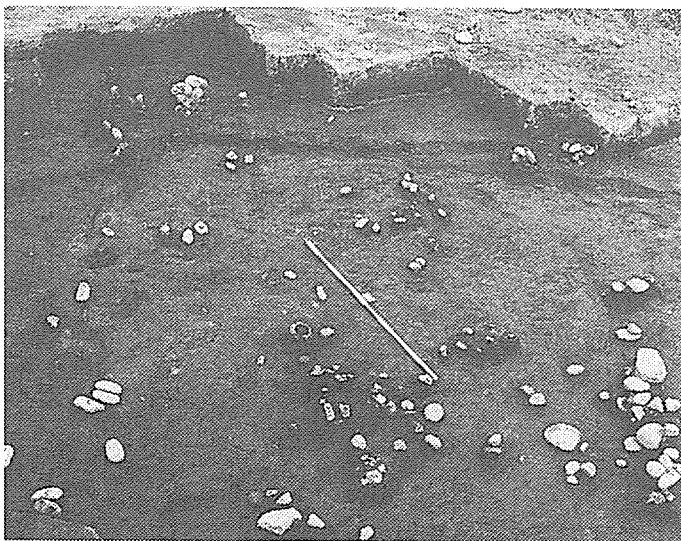
川辺町で唯一の本格的な調査が行われた遺跡地である。昭和四四年（一九六九）四月、南山大学によって発掘が実施され、縄文式土器（前期・中期）・打製石斧・有舌尖頭器・石匙・石錐・块状耳飾・石鏃・搔器などが出土した。住居址・炉跡も確認されたが、縄文時代から弥生時代にかけての集落群の遺跡地である。当時発掘調査報告書が作成されたことと思われるが現状は不明である。また発掘品は、文化庁より文化財の認定（別紙）を受けたがいずれも所在不明である。なお同遺跡は、西日本系と東日本系の二系統の土器が並存しているところとして、両系統の土器が出



松葉遺跡発掘現場



松葉遺跡（住居址）



松葉遺跡（住居址）

土した前期文化の特色ある遺跡でもある。

倉知遺跡 比久見字榎木戸

東小学校の北部にあたるが、比久見地域のほぼ中心地一帯の畑地から発見されている。縄文式土器（中期）・打製石斧などが出土したが所在は不明である。この付近は、前記土地改良事業によって発見された遺跡地と関連していて、本格的な発掘調査が行われれば、数多くの出土品のある地域である。なお、同遺跡から出土した土器の一部は、中期の文化を示す勝坂式系の土器といわれるが、勝坂式とは、神奈川県相模原市勝坂遺跡のことである。

三 縄文時代の生活

住居

飛騨川流域に家といえる住居が出現したのは、五・六〇〇年前の縄文時代前期のことである。河岸段丘上の日当りのよいところで、食物・飲料水が得やすく、排水の便もよく、住み心地のよい場所が選ばれた。

委 保 第 3 の 271 号
昭和 44 年 8 月 20 日

岐阜県 警察署 署長 殿
加茂

文化庁 長官

印

埋蔵物の文化財認定について（通知）

昭和 44 年 4 月 17 日付け _____ で提出された
下記物件は、鑑査の結果文化財と認定しましたので、文化財保護法（昭和25
年法律第214号）第61条第2項の規定により通知します。

記

発 見 者	南山大学 小林 知 生
土 地 所 有 者	武 市 喜 重
発 見 年 月 日	昭 44. 4. 2
発 見 の 場 所	加茂郡川辺町上川辺
物件の名称ならびに数量	
縄文式土器、土師器、石器等一括	

地面を三〇～五〇センチメートル掘り下げて、比較的しっかりした柱の上に屋根がふかれたが、冬は暖かく夏は涼しい住居であった。床には石囲いの炉も作られたが、この炉は生活に一つの革命をもたらした。家の中の暖房用や照明ともなつて、夜の手作業を可能にし、一方では一家団らんを中心ともなつた。

この竪穴式住居は時代とともにより合理的になり、縄文時代中期には、柱にけたが渡されて一層堅固となり、屋根には木の皮やかやなどが用いられた。天井に煙出しの穴を設け、家の周囲には雨が流れこまないように排水路も作られた。

一軒の家は四～五人が住める広さで、老人や若夫婦は別棟に住んでいたのであろう。そして一集落は平均四～五戸、大きい場合は数十戸に及んだことも考えられる。しかし食料の量と人間の数のバランスからは、一集落二〇～三〇人が適当であつたと思われる。

生活

縄文人の生活はどのようなのであつたのか。土器を作り、新しい種類の石器を次々に創造したが、金属器の知識はまだ持っていなかった。生活用具の中心は石^{せき}鏃と打製石斧で、石鏃は鳥獸を捕えるため矢柄を付け、日常生活に欠かせないものとなつた。種類も多種多様で、主にサヌカイト・黒曜石・頁岩などがその材質であつた。打製石斧は木に取付けられて、木材の伐採や土地の掘り起こしに使用され、簡単な農耕にも利用された。また川で魚を釣つたり、小さな網で漁をしたことであらう。飛騨川流域の遺跡から、石錘が出土してそれを物語っている。

食物

当時の人間が自然から採集した食物には、ニホンジカ・イノシシ・カモシカ・ノウサギ・キツネなどの獣肉、キジ・ヤマバトなどの鳥肉、それに川魚の類、そして野生のヤマイモ・クリ・ドングリ・トチなどがあつた。しかし自然を相手にした食料の確保には不安定な要素もあつて、食生活は決して豊かとはいえなかつた。獲物に逃げ

られ、妻や子どもの待つ住居に帰るにも、足どりが重い日もあったことであろう。それを救ったのが貝の発見である。人々はあるときは海にまで出掛け、あるときは川岸で貝類の採集にあたり、その味に舌鼓を打った。集落の中で狩猟、魚捕り、貝拾いといった仕事の分担も決まり、食糧の蓄えもしだいに増えていった。

これらの食物を調理する道具に、石皿・敲石・石匙などがある。石皿の上で木の実や草の根などをたたいて、粉にしたり、つぶしたりした。石匙は動物や木の皮をはがしたり、肉を料理するときのナイフに使われていた。彼らは石の道具を研磨する技術は知っていたが、種をまいて実りを刈取ることは知らなかった。しかし採集生活からしだいに原始的な耕作を行うようになり、家畜によって肉や乳を利用する知識を持つようになった。

風習

縄文人は装身具に一つの文化を表現している。それは単なるアクセサリーでなく、なんらかの社会的地位を表していたのではなからうか。骨角製品・貝類の加工品から、美装な石を用いたものなど、材質も多種多様で、首飾・耳飾・足飾と変化に富んでいた。おそらく木製品も盛んに作られたことであろう。

飛騨川流域で特異な石器に御物石器がある。この地方に多く見られる宗教的遺物で、自然に頼る生活の不安さから、なにかに依存したい縄文人の気持が、立石・立棒とともにこの遺物を生み出したとも考えられる。この御物石器は川辺町からも出土した形跡がある。

一方では土偶も各地域にわたって発見されている。多くの形態が見られるが、そのすべてが女性像である。母なる土偶は新しい生命を産む力を持つものとして、その力を得ようとしたものと想像される。

第三節 弥生時代

一 弥生文化の広まり

弥生文化

弥生文化とは、東京本郷弥生町で発見された土器に起因して付けられた名称で、ほぼ前二世紀から後三世紀にわたると考えられている。便宜上、前期・中期・後期に区分されているが、第一は、稲作農耕の開始期であり、第二は、金属器使用期にあたり、第三は、中国・朝鮮と交渉を持ちはじめた時期であった。

稲作

この時代は激しい変動の時期であったが、特に稲作に基礎を置く農耕文化の時代であり、生産の基盤となる立地や、生活の在り方にも大きな転機を迎えた。とりわけ食生活に革新をもたらす出発点となった時代であって、以来二〇〇〇年、日本人は米を中心とした生活を営んできたのである。

当時の気候は今日とあまり変わりなく、弥生人の自然開発は既にこのころにはじまっていた。重い石斧はやがて鉄の斧に代わり、いわば人間が自然を活用する時代の到来であった。それとともに、人々は同じ土地に定住して、農耕生活を基礎とした共同体を形づくり、それが貧富の差を生んで、やがて権力者が現れるようになる。いわば小集団の階級社会であった。同時に、稲作りのための道具類も技術の進歩とともに発達し、特に土器は実用型となって、ロク口の発明で大量の製造が可能となった。そして彩色土器や文様を付けたものも出現した。

この農耕生活は、濃尾平野から木曾川をさかのぼって、飛騨川流域に伝わってきた。人々は日当りのよい水田に適

した平坦地を選んで集落を構えたため、この地方にもかなりの遺跡が実在し、美濃地方の中心的存在ともなっていた。

金属器

弥生時代は日本における金属器使用の開始期にあたり、青銅器・鉄器を含めた初期金属文化の時代であった。矢につける鏃は石鏃から銅・鉄製品となり、そのほかの石器類もしだいに青銅利器へと代わっていった。

この時代稲の刈り入れには、石器から鉄の穂つみ道具が用いられ、木臼や竪杵で脱穀を行い、それと並行して銅剣・銅鉾などが部族を守る武器として製造された。さらに部族社会の精神的な支えとして銅鐸が製造され、宝器の役目をなしていたものと思われる。

昭和七年十一月、高山線工事のさい萩原町上呂地内の地下三メートルから、二口の銅鐸が発見された。高さ三〇センチメートルと三一・五センチメートルからで、両方とも袈裟襷文で一口は鮮明な文様となっている。袈裟襷文とは釣鐘によく使われている文様で、それに類似していることからその名が使われるようになった。銅鐸は県下で四個所五口発見されている。

この宝器が地中深く埋められていたのは理由のあることで、通常は日常生活に関係のない聖域に保管され、祭儀のときに取り出して用いられたといわれている。銅鐸はもともと釣り下げて鳴らす「かね」で、内側には棒状の舌があり、本体を動かすと触れあつて音が出る仕組みとなっている。はじめて金属の輝きを見、はじめて金属の音を耳にした弥生人にとって、これは神の声となつて聞えたのであろう。それゆえ銅鐸は神聖な宝器となり、部族の中心的存在となつていたのであろう。

銅鐸は、中部地方を境にして西日本に多い。そこにはなんらかの支配関係が存在していたことが想像される。縄文

時代の日本の全人口は一五〇二五万人ともいわれ、弥生時代のそれは一五〇〇四五〇万人であったことを考えれば、既に階級社会が生じていても不思議ではなく、これらの宝器がその中心となっていたとも考えられる。

弥生時代で忘れてならないのが木工技術の発達である。水田耕作用の農耕具や、かんがい施設などで、鉄器の登場で細かい加工や部品の製造が可能になったからである。それは弥生時代独特の技術の展開であった。

当時の遺跡として美濃加茂盆地がある。弥生時代に美濃地方の一つの中心地をなしていたといわれる地域で、遺跡数も多く大量の土器が出土している。そのうち美濃加茂市二ツ塚遺跡は木曾川と飛騨川の合流点に近く、発掘された土器はこの地方独自の特徴を持つもので、壺形土器と深鉢形土器が主なるものであった。

同市追上遺跡は、川辺ダムを見下す飛騨川左岸の平坦な段丘上にあつて、壺形土器・高杯形土器などが出土した。

そのほか、美濃加茂市則光・狭間遺跡があり、さらに上流の白川町には小丸山・薬師・中の森などの遺跡があつて、流域の多彩な弥生時代の一頁を飾っている。

弥生式土器の経路は、伊勢湾沿岸よりの伝播が主流であるといわれているが、各地域独自のものも出土している。土器とともに石器類もかなり採集されたが、石鏃が非常に多く、当時の食生活の変化を物語っているようでもある。

一一 川辺町の遺跡

遺跡

弥生時代の遺跡は、その多くが縄文時代遺跡からの継承であつて、川辺町も一部を除いて縄文時代と同一地域から、弥生式土器が出土している。しかし町内の弥生時代の遺跡は、本格的な調査は行われていないが、

複数の遺物が出土した地域は次のようである。

椎ノ木遺跡 西栃井字椎ノ木

濃飛タイル(株)の南、川辺ダム上流の飛驒川沿いにある遺跡で、現在は宅地開発によって平地化され、原形は失われている。関係者の話から、完全な深鉢形土器が出土したといわれているが所在は不明である。あるいは縄文式土器とも考えられる。そのほか石器類や石鏃も数多く出土したが散逸している。

能義遺跡 中川辺字能義

天龍工業川辺工場建設のさい、縄文時代の遺物とともに出土したもので、十分な調査も行われなかった。関係者の話あるいは一部の破片から、弥生式土器と判定できる程度である。そのほか石鏃も数多く出土したといわれているが、現在では散逸している。

濡枝遺跡 中川辺字濡枝

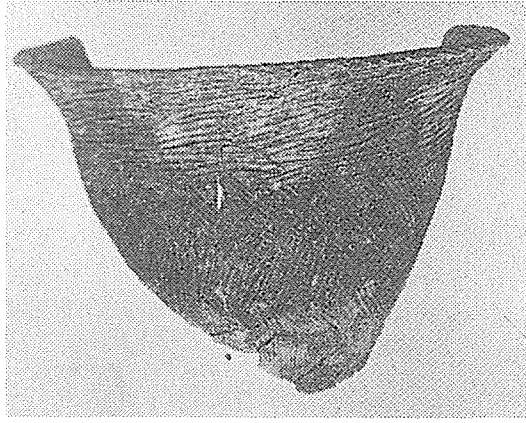
川辺中学校やプール新設のさい、縄文時代の遺物とともに広範囲に出土し、一部は中学校に保管されているといわれているが特定できなかった。弥生式土器や石鏃・石片が数多く出土したが、散逸して所在不明である。

倉地遺跡 比久見榎木戸

東小学校北部にある広大な遺跡地の畑地から、縄文時代の遺物とともに土器が出土した。完全な壺形土器もあったといわれているが、散逸して明らかでない。そのほか石器類も出土したが所在不明である。なお飛驒川左岸には、短い間隔において貝田町式と称される土器が出土する美濃加茂市下米田・川辺町上米田・白川町赤川があつて、共通の弥生文化圏が構成されていたのである。

比久見地内は、愛宕山の山麓から下吉田地内にかけて、広範囲に遺物が散布していた。以前は、畑の耕作あるいは降雨後には石鏟・石片・土器片が容易に採集できたという。また戦時中に、桑園・栗林を開拓して陸軍兵舎が建設されたときには、多数の遺物が出土したことが伝わっている。写真の石斧・石鏟・石匙は、白山神社付近の出土物である（岩井一行氏所蔵）。

川辺町内の遺跡を調査すると、縄文式・弥生式土器あるいは石器類は、町内各地から出土していて、特に石鏟は全域から発見されている。しかし当時は人材もなく、管理がされないまま放任状態であった。したがってそのほとんどが遺失されているが、川辺町の原始時代を解明する重要な遺物が散逸したことは、残念のきわみである。

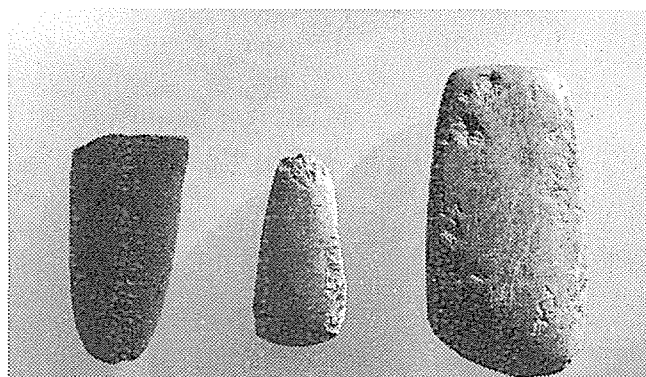


倉地遺跡出土品

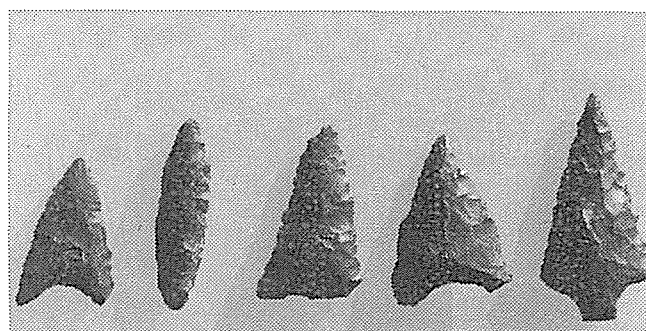
三 農耕と生活変革

水田と畑作

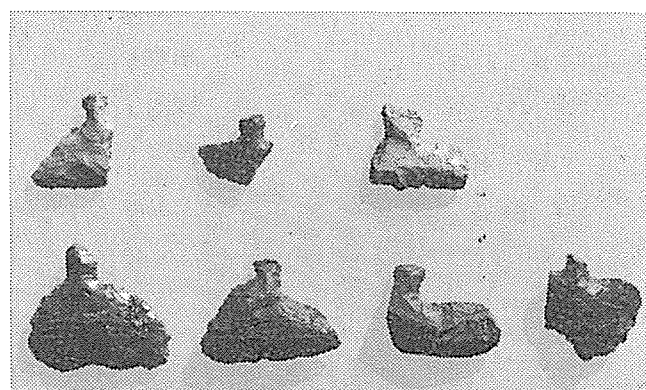
弥生時代に水田が作られた場所は、河川の土砂により形成された地域や、小河川が大河川に注ぐ洲と
呼ばれる土地が対象地で、いずれも湿地帯であった。これは水利を考えてのことであり、一方では排
水をいかにするかが最も肝要なことであった。かんがいによる水を板で囲んで保水に務めながら、低地への排水路も
既に考えられての水田であった。そして田植は行わず直接種をまく方法がとられていた。いわゆる直播^{しかまき}である。その



磨製石斧



石鎌



石匙

さい、前年の稲株の根を土中に押し込んで、木製の鋤を使って田の表面を均等にならして高低をなくした。

種は事前に水につけておき、その後陰干しをしてから水田にまいたが、種まき後は、水利を常に見回って除草に務めた。そして収穫期ともなれば、石包丁によって稲穂を刈り取ったが、石包丁とは、石板に二つの穴をあけて紐を通し、指をかけて稲穂を摘み取る道具である。現在の鎌の代用であり、弥生時代後期に入ると鉄製の鎌も出現し、稲は根元から刈り取られるようになったともいわれている。収穫した稲は倉庫に納められたが、中期以降には高床の倉庫も造られるようになった。米の脱穀には竪杵と竪臼が用いられたが、精白した米は現在と同じように炊飯されていた。畑地は焼畑耕作も考えられるが、耕作には踏鋤が使用された。スコップの形をしたもので、その後二叉に分かれた鋤も使われるようになった。しかし最も重要な作業は除草であった。常に鋤などで雑草の除去を行ったことであろう。穀物の収穫には稲作と同様の石包丁が利用された。収穫後の茎は火を付けて燃やしたものと思われる。作物としては既に麦・粟が植付けられ、豆類などの栽培も行われていた。

狩猟と漁労

弥生時代の狩猟動物は、シカ・イノシシ・ノウサギなどで、特にシカが多数を占めていた。狩猟用具としては、弓と矢そして槍が主なるもので、やがて先端に石器を取り付けたものも使われるようになった。

漁労は、フナ・コイ・ナマズが対象であったが、特にフナやコイが多かった。これらの魚の骨は貝塚の中から発見されている。漁労用具としては、小さな網を使って魚を捕っており、遺跡から石錘・土錘の出土により、あるいは小規模の投げ網が使用されていたことも考えられる。

野山での植物を採集することも重要なことであった。その種類は、ドングリ・イチゴ・ワラビ・ヤマイモなどと推

定されているが、遺跡からは出土することが少ないので明らかでない。

生活

初期の稲作は、低湿地に分散して耕作が行われたが、やがて沃地が開発されて水田耕作が可能となると、指導者のもとに共同作業が実施された。必要な道具類も共同製作となつて、石器から鉄製に変わる技術革新が生み出されていった。

食生活が安定すると人々は一定の場所に定住するようになる。いわば食糧の安定自給の時代であつて、やがて集落が出現し、集落と集落がまとまつて一つの集団が発生することとなる。そして集落はより大きな集団となつて、やがて地域社会へと発展してゆくのであつた。

弥生人の日々の生活も大きく変わり、種を育てて植え、そして収穫するという農作業が定着していった。そして農閑期には狩猟や自然の食物採集が、重要な栄養源として欠かせない仕事であつた。一方この時期には、土器を製作したり、農耕用具を手入れすることも行われたが、織物の技術も伝わって紡糸や平布も出現するようになった。

この時代の特色として金属器の使用がある。種類は青銅器と鉄器の二種類があつたが、青銅器は主に祭器用具として、鉄器は生活用具として使用された。特に鉄器は、農耕具などの製造に必要な不可欠な用具として、やがて幾多の種類の用具を出現させることとなった。弥生人は、鉄製の道具で樹木を伐採して木製の道具を作つたりしたが、その切れ味に驚いたことであろう。それが生活の様相を変えていったことは、容易に想像できるものがある。

自然に依存し、自然とともに生活してきた人間が、この時代を迎えて、農耕を基調とした生活に大きく変革していったのである。

第四節 古墳時代

一 古墳の分布

古墳の発生

古墳時代とは三世紀末から七世紀にわたる時代で、前期・中期・後期に区分されている。農耕の発達によって経済力が上昇すると社会の組織も進歩し、やがて小国家形態をとるようになり、古墳の出現となった。前期には山頂や平野に大規模な墳丘を築き、内部に竪穴式石室を設けて宝器を副葬した。後期になると周辺の山麓に小規模な墳丘が築かれ、内部には横穴式石室が設けられて、死後の生活を営むための用具が埋葬された。死者を葬る土盛りの習慣は大陸から伝わったが、この墳丘を大規模にすることが大和朝廷のブームとなり、権力者や豪族の勢力誇示の道具となった。特に崇神王朝から仁徳王朝に至るまでが最も盛んで、まさに墓づくりコンクールの感があった。世界最大の墳墓仁徳陵が出現したのもこの時期である。

形は円墳が多く、前方後円墳もかなり現存しているが、横穴式石室が伝わってからは、石室が美しく築造されるようになった。いずれにしても、それを造りあげるには強大な権力と財力を必要とし、多くの人口を包抱した集落と、共同体の形成が背景となっていたことであろう。

古墳の推移

古墳時代前期には、豪族の首長は司祭者としての性格を持っていたが、中期になると多分に政治的な支配者に推移していった。さらに後期に入ると、数多くのグループを統括した地域集団としての性格

を持つ勢力へと移行している。

初期の古墳は独立性の強いものであったが、やがて小豪族の連合によって地方国家が形成された。そして強力な豪族が盟主となって、連合国家体制が形成されると、古墳も大規模なものとなっていった。いわば勢力分野としては、大和の帝王による中央政権があり、地方には小豪族を統合した大豪族があつて、しだいに帝王の統治下となっていく。この時期になると美濃・飛驒両国も、この政権下に組み入れられていたものと思われる。

七世紀になると、さしも全盛を誇った古墳築造も衰退を迎えることになる。薄葬令という朝令が出され、墓の規模が制限されたからである。しかし築造競争の犠牲者は農民で、何日も何十日も奉仕の労働を強制され、それが収獲の減少と人心の動揺を招いていった。権力者もこのことを謙虚に反省したのであろう。古墳築造技術の終末であつた。

流域の古墳

岐阜県には三〇〇〇基からの古墳が確認されているが、美濃地方に多く飛驒地方は比較的少ないのが現状である。県内の古墳の最大のもは大塚古墳（大垣市赤坂町）で、全長一二〇メートル、次いで琴塚古墳（岐阜市琴塚）の一五メートルなど、かなり大きな墳墓が実在している。これらの古墳からは鏡をはじめ直刀・勾玉や、多種多様の鉄製品が出土している。この時代の文化の流れは古墳に代表されるが、その分布状況や規模・出土品によって、当時の文化の変遷を知ることができる。

流域周辺の古墳としては、美濃加茂市四〇、坂祝町一五、富加町四六、八百津町三などがある。そのほとんどが円墳で、前方後円墳も美濃加茂市・富加町に各一基実在している。

加茂盆地に集中している古墳は、ほとんどが円墳で、原形が失われているものが多い。美濃加茂市下米田の山麓には、三〇基からの小円墳が数基ずつ点在しているが、西脇にある稲荷塚古墳が大形の円墳である。そのほか可児市に

は、土田・前波・広見・川合の各地域に古墳群が集中していて、県下でも有数の分布となっている。

飛騨川流域の古墳の北限は川辺町で、これより以北には金山町・萩原町などに数基残っているに過ぎない。しかし古墳の多くは破壊され、あるいは消滅したものの、かろうじて原形をとどめているものなどがその実態である。

二 川辺町の古墳

古墳の現況

町内の古墳は、昭和一〇年（一九三五）の調査では一七基が確認されている。いずれも円墳で、地区別では下川辺一、西栃井一、中川辺二、上川辺一〇、比久見三で、石室が確認されたものは四基あった。このうち比久見地区には、以前は三基以上の古墳が実在したとの伝承がある。上川辺地区には既に豪族が定着していて、下川辺・西栃井・中川辺各地区の小豪族を支配下に置いていたものと思われる。また比久見地区にも豪族の実在が考えられ、米田方面を支配していたのであろう。そのため両地区に古墳が集中したのである。

古墳からの出土品も多く、直刀・勾玉・土器・鉄製品が発見され、江戸時代の元禄九年（一六九六）には、上川辺の道塚古墳から多くの彩色玉が出土したとの記録がある。

これら出土した遺物の所在は大部分が不明で、一部は小・中学校に保管されていたといわれるが明らかでない。一方古墳内の巨石も、その多くは建石材に使用のため持ち去られたという。その中で昭和五八年（一九八三）に、東小学校の崩壊した円墳の発掘調査が行われたが、横穴式石室が確認され、土器・鉄製品も出土している。

川辺町には古墳と推定されるものは現在一三基あるが、地域別には次の通りである。

天池古墳 下川辺字天池

国道四一号を右折し、下川辺地内に入つてすぐ左側の民有地内にある円墳で、既に破壊されている。石室に使用されたと思われる石材が幾つも露出し、長さ四メートル、高さ五〇センチメートル程の、土盛りの上部には山神が祭つてある。全長一〇メートル前後の円墳と推定される。

戦前の考古雑誌によれば、祝部土器（須恵器）・勾玉・直刀が出土したとの記載がある。

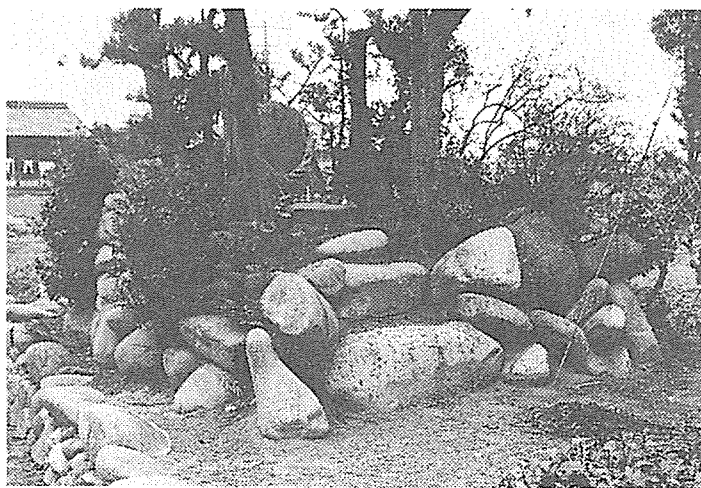
神堂古墳 上川辺字杜宮地

民有地内にあつた古墳で、国道四一号の新設工事により原形は失われている。以前は石室の入口が露出していたといわれ、現状は全長二〇メートル程の土盛りの上に、猿田彦の小社が祭つてあつて円墳と推定される。

国道工事以前に既に破壊されていて、工事中に三点程の須恵器（壺形土器）が出土し、川辺中学校に保管されているとのこと、しかし特定することができなかった。

道塚古墳 上川辺字道塚

国道四一号沿いにあつたと推定される古墳で、現状は耕地となつていて所在場所は明らかでない。ただ古墳に使用されたと思われる石材十数個が、付近に残存していて円墳と推定される。元禄九年（一六九六）に、“崩壊によって甕・青玉・管など数百個が出土した”との記録は、この古墳のことである。



天 池 古 墳

火塚古墳 上川辺字数間野

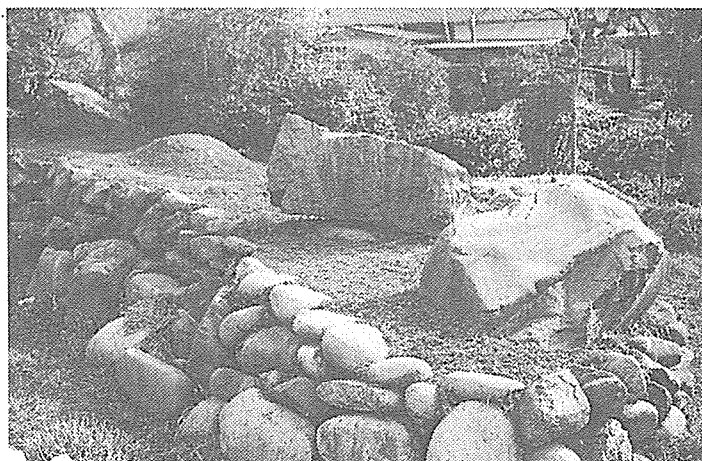
北小学校西の民有地（山林）内にあって、山の斜面を利用して築かれた古墳である。往古より火塚の名称があるが、全長一〇メートル、内部には四メートル四方の石室があり、崩壊が進んでいて天井の巨石がかなり傾斜しているが、遺物は既に散逸して、所在不明である。

天徳古墳 上川辺字天徳

水無瀬川から西に入った民有地（山林）内にあって、山の斜面に築かれた古墳である。石が露出している状態であるが、恐らく石室の天井部分の崩壊によって、露出したものと思われる。一部盛土も散見されるが古墳の規模は不明である。

鵜飼古墳 上川辺字鵜飼

国道四一号より西に入った平坦地内の、民有地（山林）にある円墳である。高さ三メートル、直径一三メートル、全長一七メートルの規模で、前部の一部が方形となっているが、前方後円墳とは異なっていて、祭事場跡とも考えられる。後部に露出部分もあり、以前は土器破片が摘出されたといわれるが、全体的に発掘された形跡もなく、頂上に



神 堂 古 墳



火 塚 古 墳

は神社跡の礎石が残っている。

神坂一号古墳 上川辺字神手

神坂古墳群の一つで、道路を西へ入った上石神共有林の中にある。戦前（昭和一〇年ごろ）の砂防工事中に発見され、巨石や土器が出土したといわれているが、遺物は不明である。現在は上部がほとんどなく、わずかに円墳と推定される程度である。

神坂二号古墳 上川辺字神手

一号古墳と同一地内にあるが、共有林を三〇メートル程登った山腹の斜面を利用して築かれていたという。戦前の砂防工事中に巨石が発見されたが、恐らく土器なども出土したことであろう。現在では樹木が繁茂している、全容を知ることが不能である。

小田一号古墳 上川辺字口神坂

道路の東側に隣接した宅地内にあった古墳である。大正年代の宅地整地中に石室が発見されたといい、現在は建物の下に埋まったままである。円墳と推定されるが、数多くの土器と直刀が出土し、当時の川辺小学校に保管されていたとのこと、しかし特定することができなかった。

小田二号古墳 上川辺字口神坂

道路西側、溜池の南にあったといわれる町有林内の古墳で、放水口工事中に発見された。昭和四〇年代まで巨石二



鵜飼古墳

個が道路に放置されていたが、道路工事のさい移動しその所在は不明である。付近の古墳から円墳と推定されるが、現在では形状が全く認められない状態である。

神手古墳 上川辺字神手

道路東側、溜池の北の民有地（山林）内にあつて、距離的には、道路より一〇〇メートル程入った山腹に築かれた古墳である。以前は巨石が露出していたが、その所在は不明であり、現在はずかな凹みが見られる程度である。付近一帯は樹木が繁茂していて全容を知ることとはできない。

上ノ番古墳 比久見字上ノ番

白山神社境内にある古墳である。大正一〇年（一九二一）の改築のさい整地され、上部が全長二〇メートル程の社頭敷地となつていて円墳である。整地のさい発掘された幅一・二メートル、長さ二・〇メートルの板石は石室上部の一部であり、現在は神社の裏手に据え置かれている。土地の均平化と樹木の繁茂により明らかでないが、かなり規模の大きな古墳であつたことが推定できる。

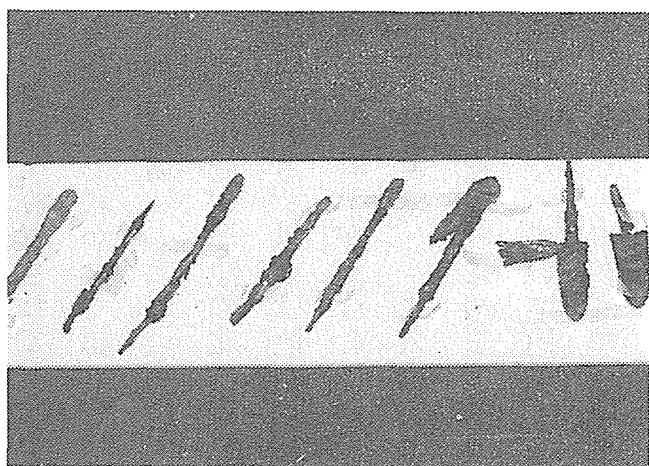
東小学校二号古墳 比久見字大竹林

小学校西隣りの畑地にあつて、昭和五八年（一九八三）一二月に発掘調査が行われた。東小学校児童が、実験用理科教材を採集中に偶然に石組を発見し、須恵器も出土したため発掘が行われた。以前東小学校校庭に古墳があつたことから二号古墳と命名された。

発掘調査概況によれば、古墳は既に削平されていて現状は平坦な畑地となっている。そのため墳丘の残存は認められず、古墳の形態・規模を決定できる根拠は存在しない。しかし横穴式石室を持つ、直径約一二メートル前後の円墳

と推定される。内部主体の石室は大半が破壊・削平されていて、下部の側壁と床面が残存していた。

石室は、偏平な円礫を用いて構築されており、主軸方向はほぼ磁北に一致する。規模は全長約六メートルで、玄室部は長さ約五メートル、幅二・二メートルである。羨道部は長さ一メートル、幅約一・五メートルである。玄室部と羨道部には明瞭な境（玄門）はみられないが、西側壁が内側にせり出して羨道部をなしている。石室の高さは削平のため明らかでないが、床面から約六〇センチメートルが残っていて、床面は玄室部に人頭大の偏平な円礫が敷かれている。羨道部は素掘りのままで礫床はみられない。



東小学校二号古墳出土品



東小学校二号古墳出土品

出土遺物としては、土器類では須恵器の坏・高坏・短頸壺など数十体分、土師器は甕・甕があり、鉄製品としては直刀・鉄鏃がある。これらの遺物はすべて玄室内より出土したが、特に新しい形態を持つものでもなく、当該期の副葬品としては一般的なものであった。古墳の築造年代は須恵器の製作年代より、六世紀後半から七世紀前半にかけての時期と推定できる。

飛騨川流域における古墳の築造は、川辺町が最上流部とされているが、当町内では今ま

でに古墳の発掘調査は実施されていない。したがって、この発掘によって当町の古墳時代文化の一端が解明されたのであった。

そのほか比久見地内の山麓あるいは畑地からは、古墳時代の遺物が出土している。戦時下の昭和一九年には、軍需工場建設のさい鉄製直刀・須恵器（高坏・短頸壺）が出土し、戦後の昭和二三年には、開拓地開墾のさい勾玉が出土している。

三 集落の形成

集落

古墳時代の住居は、縄文・弥生両時代と同じように竪穴住居が主流であった。しかし多少の変化のきざしも否定できず、特に屋根は角形・長方形が登場するようになった。これらは日々の生活に順応したもので、建物もその後平地へと移住するようになった。それにともない、炉に代わって“かまど”が設置されるようになり、炊きが効率的になっていった。そして納屋や高床倉庫も数多く造られるようになり、多種類の建物を配置する家屋も出現するようになった。

古墳時代の前期には、竪穴住居が数単位で共同生活をもつようになり、これがさらに数十単位となって村が構成されるようになった。これらは当初は血縁関係が一個所に住居を構えたもので、その後、耕地や収穫物を共同管理する必要から集団となっていった。一家には家長が存在し、やがて集団の長としての首長が出現するようになった。

首長は、村の司祭者として重要な地位を占め、特に祭事は大切な集団の行事であって、首長は重大な役割をもって

いた。これらがやがて、祭政一致の古代社会となって、小国家を形成してゆくのである。

生業

水田耕作は、大多数の世帯で行われていたものと思われるが、耕作道具も木製から鉄製へと移行していった。古墳時代中期には、鉄製の鍬や鋤が製造され、一方鉄の鎌も出現して、刈り入れも従来より効率的になった。いった。

当時の水田は大小種々で、幅三〇センチメートル程の方形のものから、一〇〇平方メートルに及ぶ一枚田もあったと推定されている。これらの田には水利の便を必要とし、五世紀末には、堤防によって小河川を締め切る方法もとられている。いわゆるかんがい用水である。

畑作も人々にとっては重要な農作であった。既に大麦・小麦・豆類も栽培されていたと推定されている。しかし当時の畑作は野菜が主力でなく、陸稻や雑穀が栽培の中心であった。いわば主食が主流の時代であったのである。